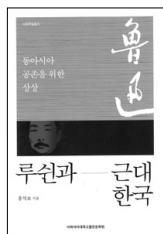


『近代朝鮮』は魯迅にどう出会ったのか

洪昔杓著

루선과 근대 한국

동아시아 공존을 위한 상상



22.5 × 15.4cm

502頁

梨花女子大学出版文化院
[29,000ウォン／朝鮮語]

畑山 康幸

今年（二〇一七年）二月、韓国では洪昔杓（ホン・ソクビョ）著『루선과 근대 한국 동아시아 공존을 위한 상상』（魯迅と近代朝鮮 東アジア共存のための想像）が出版された。本書は日本の統治下、さらには南北にふたつの政権が成立するまでの朝鮮が、どのようにして魯迅と出会い、また作品を誰がどのようにに翻訳、研究してきたかを究明したものである。

『近代朝鮮』と魯迅のかかわりについては、藤井省三『魯迅——東アジアを生きたる文学』（岩波新書、二〇一一）に収められた「脈々と続く『魯迅読み』の伝統——朝鮮・韓国と魯迅」にその概略が記されている。また三寶政美「魯迅と朝鮮人ジャーナリストの出会い」（『東方』一九八四年八月号）、長璋吉「朝鮮・言葉・人間」（河出書房新社、一九八九）、南雲智「朝鮮・朝鮮人・『魯迅日記』（季刊『靑丘』一九九〇年三号）など

もこの問題に言及したことがある。中国では魯迅博物館編『韓國魯迅研究論文集』（河南文芸出版社、二〇〇五）や『韓國魯迅研究精選集』（中央編訳出版社、二〇一六）がすでに出版されている。韓国で魯迅と『近代朝鮮』のかかわりを一冊にまとめたのは本書が初めてである。

著者の洪昔杓はソウル大学、同大学院で中国文学を専攻し、博士論文「中国の近代文学意識の形成に関する研究——胡適の白話文運動と魯迅の小説創作を中心にして」をまとめた。現在は梨花女子大学中国文学研究所所長を務め、近代における朝鮮と中国の文化的・思想的交流を研究している。著書に『中国現代文学史』（二〇一〇）、『中国近代学問の形成と学術文化談論』（二〇一一）があるほか、『魯迅全集』の翻訳にも取り組んでいる。

本書では、一九二〇年代に魯迅に会った詩人・呉相淳、「狂人日記」を翻訳した柳樹人、一九三〇年代に「阿Q正伝」を翻訳した梁白華、魯迅の作品に関する評論を発表した丁来東と金台俊、魯迅を取材したジャーナリスト申彦俊、魯迅と思想的に共鳴した詩人・李陸史、一九四〇年代に魯迅の作品集を翻訳出版した金光洲、さらに卒業論文に魯迅を選んだ李明善らについての調査研究を、当時発表されたこれらの人々の論文や手記とともに、五〇〇頁余りの著作にまとめている。

朝鮮半島に魯迅の名を初めて紹介したのは、青木正児の「胡適を中心にしてゐる文学革命」（一九二〇）を同年に雑誌『開闢』に翻訳紹介した梁白華である（藤井省三『魯迅』）。また魯迅文学の最初の朝鮮語訳は雑誌『東光』（一九二七年八月号）に発表された柳樹人訳による「狂人日記」である。魯迅の作品が、日本国内で最初に翻訳発表されたのは一九二七年一〇月の「故郷」であることから、中国国外での外国人による魯迅の作品翻訳は朝鮮語訳が世界最初である（同）。

本書では、こうした翻訳に先立って、魯迅に出会った人物として呉相淳をあげている。呉相淳は「アジアは夜が支配する、そして夜を統治する」（「アジア最終夜の風景」と詠んだ詩人で、金素雲訳編『朝鮮詩集』（岩波文庫、一九五四）にも作品が収められている。本書『魯迅と近代朝鮮』で評者の興味を引いた

のは、呉相淳が魯迅と出会ったのは盲目の詩人・エロシエンコとエスペラントの導きによるものだとした点である。一九二二年五月二三日の北京世界語（エスペラント）学会創立の際の記念写真が本書に掲載されている（二七頁）。これには呉相淳が魯迅、周作人、エロシエンコらとともに写っている。

呉相淳は一九二二年から同志社で宗教哲学を学び、一九一八年に朝鮮に戻ったあと、文学誌『廢墟』の同人となった。『廢墟』の創刊号表紙には、エスペラントでも雑誌名が書かれ、LA RUNITO〔注：エスペラントで『廢墟』の意〕と題する詩人・金億のエスペラント詩が掲げられている。呉相淳は創刊号に「時代苦とその犠牲」を発表し、そのなかで「わが朝鮮は荒涼たる廢墟」と述べ、「一切を破壊し、一切を建設し、一切を革新革命し、一切を改造再建し、一切を解放し」と訴えた。洪昔杓によれば、呉相淳は秋田雨雀や柳宗悦らに手紙を送ったことがあり、こうした関係から「エロシエンコと接触し、かれからエスペラントを自然に習得する機会をもった」と述べている。洪昔杓は、呉相淳がエロシエンコとともに中国のエスペラント運動にも参与し、周作人日記（一九二二年四月一四日ほか）にもアナーキストの李又観とともにその名が登場していると指摘している。

洪昔杓は「朝鮮の知識人にとってエスペラントとアナーキズ



北京世界語（エスペラント）学会創立の際の記念写真
前列右から4人目がエロシエンコ、左から2人目が呉相淳

ムは、国家と民族を超えて相互理解と思想的連帯を可能にする重要な言語的道具であり、思想的武器であった。朝鮮の独立が切実であった時期にかれらはエスペラントとアナキズムを媒介としてエロシエンコ、魯迅、周作人と交流しながら思想的連帯を模索した」と書いている。

一九三〇年代に入ると、朝鮮では魯迅の作品がさらに翻訳され、中国の現代文学についての評論も登場することになった。梁白華は「阿Q正伝」を一九三〇年一月四日から二月一六日にかけて『朝鮮日報』紙上に

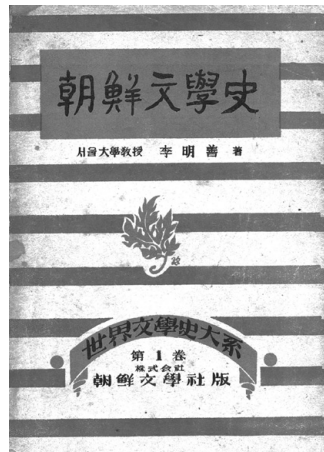
翻訳掲載した。ところが洪昔杓は、梁白華の「阿Q正伝」の翻訳、とりわけ誤訳について、意外な事実を指摘している。「阿Q正伝」が井上紅梅によって日本語に翻訳されたのは、一九二八年の『上海日日新聞』紙上であった。この翻訳は翌年、日本の雑誌『奇譚』に「支那革命崎人伝」として連載された。こうしたことから洪昔杓は、梁白華は翻訳にあたって井上訳「阿Q正伝」を参考にしたとしている。洪昔杓はさらに、梁白華は翻訳に解説も付したが、それは井上紅梅の「支那革命崎人伝」にある解説を「ほとんどそのまま」訳したものであることを明らかにした。また梁白華の「阿Q正伝」は、「翻訳文の語彙、文章構造、段落区分など井上紅梅の『阿Q正伝』と大部分一致する」とも述べている。こうしたことから梁白華の「阿Q正伝」翻訳は井上紅梅「支那革命崎人伝」の重訳である」と結論づけたのである。

洪昔杓は、梁白華が自身の翻訳を日本語からの重訳であることを明らかにしなかったのは問題だとしながら、「井上紅梅の日本語翻訳があまりにも誤訳が多かった」のがその原因であるとも述べている。これは「近代朝鮮」における初期の中国文学の翻訳事情を伝えるものとして興味深い。

本書では学生時代から魯迅研究、中国文学研究に取り組んだ李明善（次頁写真）にも目を向けている。李明善は解放後に初



魯迅をテーマに京城帝大の卒業論文を書いた李明善（本書 287 頁から）



解放後初めて「世界文学史大系」第1巻として出版された李明善著『朝鮮文学史』（朝鮮文学社、筆者所蔵）

文学史概説」、「支那小説解題」などを講じたことが知られている。李明善が京城帝大で学んでいたころは日中戦争の時期と重なる。

李明善は一九四五年までに「魯迅について」など三編の論文を当時の新聞や雑誌に発表した。また雑誌『人

文評論』に老舎の「開市大吉」を魯夫の筆名で翻訳し、同じ雑誌に「周作人論」を李魯夫の名で掲載している。魯夫の筆名が魯迅にちなんでいることは明らかである。

李明善の名はこれまで韓国の学界で注目されることは少なかった。それはマルクス主義にもとづく『朝鮮文学史』を著したことから、左翼教授とみなされたほか、朝鮮戦争で北朝鮮の人民軍がソウルを占領したとき、ソウル大学の総責任者を引き受けたこと、戦争のとき越北（注…北朝鮮の政治体制に同調して北に行ったことの韓国での表現。北朝鮮では入北という）したことと無縁ではない（以後行方不明）。このため「反共」

を国是としてきた韓国で李明善とその研究は受け入れられなかったのである。

李明善が卒業論文に魯迅を選んだ理由として洪昔杓は、京城帝大助教で、魯迅に三度会ったことのある辛島驍の影響をあげている。辛島驍は当時「中国新文学運動の回顧」、「支那

しかし二〇〇七年には『李明善全集一〜四』（ソウル・報告社）が出版されるなど再評価が始まっている。洪昔杓は『魯迅と近代朝鮮』で、「中国現代文学の研究者としての李明善を積極的に評価する必要がある」と強調している。

『近代朝鮮』における魯迅研究は、一九二〇年代に始まり、一九三〇年代、解放空間（一九四五年から南北にふたつの政権が成立するまでの期間）に盛んであったと洪昔杓は指摘している。しかし「朝鮮戦争以降、魯迅研究は冷戦体制によって中断せざるをえなかった」と記した。中国が人民志願軍を朝鮮戦線に送り、アメリカを中心とする国連軍、韓国軍と対決したため、休戦後も韓国は中国と外交関係になかったからである。しかし、朝鮮半島全体を視野に入れた場合、北朝鮮では一九四六年発行の『文化戦線』第二輯（北朝鮮文学芸術総同盟機関誌）に金浩の「魯迅逝世十周年を迎え 人間魯迅」が掲載され、朝鮮戦争後の冷戦下でも『魯迅選集』（平壤・国立出版社、一九五六〜一九五七）や『魯迅作品選』（平壤・朝鮮文学芸術総同盟出版社、一九六四）が翻訳出版されるなど、洪昔杓が言うように必ずしも「冷戦体制によって中断」していたわけではない。

韓国で魯迅についての本格的な研究がなされるようになってきたのは一九九〇年代中盤以降のことである。その理由として

洪昔杓は「一九八〇年代以降、韓国人の民主化意識が拡張し批判精神が高揚」したことをあげている。加えて一九九二年に韓国と中国が国交を樹立したことも作用しているのであろう。

評者が本書を読み、とりわけ印象に残ったのは、事実を積み上げたその実証性にある。本稿で言及できなかった記述にも興味深い点が多く、韓国における魯迅研究のひとつの到達点を示している。

洪昔杓は本書で、日本の魯迅研究を「中国のそれに劣らず注目すべき学問的成果をあげてきた」と高く評価した。その一方で、韓国では魯迅研究が「大きく高潮したのに比して、この時期に中国と日本の魯迅研究は小康状態に入り始めた」とも指摘している。長いレースを駆けてきた中国や日本の魯迅研究者が一休みし、ふと後ろを振り向いたとき、遠くにいたと思っていた韓国の研究者が実はすぐそこまで迫っていることを本書『魯迅と近代朝鮮』は如実に示している。

しかし、こうした貴重な研究成果が、北朝鮮を含めた民族全体で共有しえない現実こそ、朝鮮半島における魯迅研究に残された大きな課題である。

（はたやま・やすゆき 東アジア現代文化研究センター）